慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	抵抗する手紙 : "No telephone to heaven, Lucy, the God of small things"にみる母への応答（不）可能性
Sub Title	Writing back to the letter : dis/connections with the motherlands in "No telephone to heaven, Lucy, and the God of small things"
Author	深瀬, 有希子(Fukase, Yukiko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.45 (2004.) ,p.21- 34
JaLC DOI	
Abstract	For the post-colonial writers who explore the life of people in diaspora, the concept of “the mother” is significant because, as Simone A. James Alexander argues, it “is the cord that (dis)unites the motherland and the mother country.” While “mother countries” signify Western colonial rulers such as England, France, and the United States, “motherlands” include the colonized countries such as India, the Caribbean, and Africa. In addition to the geographical and political senses, “the mother” also means a biological or surrogate figure in the homeland. Alexander further claims that the nurturing figure can be “other,” in other words, “an enemy to her daughter, particularly when she appears to advocate colonial habits and mannerisms.” Actually, while the post-colonial writers expose mother-daughter relationships which are negatively affected by the colonial rule, they also create subversive figures who challenge the legacy of colonialism. Examinations of how the female protagonist Clare in Michelle Cliff’s No Telephone to Heaven (1987) and Lucy in Jamaica Kincaid’s Lucy (1990) receive the letters from their mothers, and how they respond to them will show psychological dis/connections with their mothers and motherlands. Moreover, by comparing the descriptions of the letters exchanged between a male character Chacko and his mother in Arundhati Roy’s The God of Small Things (1997) with those appeared in the other two novels, it will be clear that the gender difference plays a significant role in the construction of the characters’ relationship with their mothers and motherlands.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara

_id=AN10030060-20040930-0021

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

抵抗する手紙

——*No Telephone to Heaven*，*Lucy*，*The God of Small Things* にみる母への応答（不）可能性——

深 瀬 有 希 子

1.

ディアスポラを探求するポスト・コロニアル小説において，“mother” という言葉は注目に値する。Simone Alexander は，“othermother” という，アフロ・アメリカン共同体における，生物学的母親に代わる養育者の存在についての議論を踏まえながら，ポスト・コロニアル的母娘関係を次のように説明する。「母親が娘に植民地主義的慣習，作法を諭すときに，生物学的母親が『他者』，言い換えれば，娘にとっての『敵』となる」(7) [1]。さらに，“mother” という言葉は，インド，カリブ海諸国，アフリカ各国を含む母国（motherlands）と，イギリス，フランス，そしてアメリカ合衆国を含む宗主国（mother countries）を，「切り離すと同時に結びつけるコード」としても機能するとも述べる（Alexander 7)。つまり，“mother” なる概念は，植民地主義的言説を維持すると同時に，その神話を自ら解体する可能性を持っているのである。よって，ポスト・コロニアル小説では，植民地主義の負の遺産としてあらわれる敵同士としての母娘関係だけではなく，それに異議をさしはさむ転覆的関係として，母娘が描かれることになる。本論文は，ジャマイカ出身の Michelle Cliff（1940–）の *No Telephone to Heaven*（1987）における母娘関係を中心に，アンティグア出身の Jamaica Kincaid（1949–）の *Lucy*（1990）と，インド出身の Arundhati Roy（1961– ）のブッカー賞受賞作品 *The God of Small Things*

（1997）を含めた三作品に共通するテーマ，「母国にいる母親からの手紙への応答」に注目する。具体的には，*No Telephone to Heaven* と *Lucy* においてはそれぞれの作品の女性主人公と母親との手紙の交換，*The God of Small Things* においては男性登場人物と母親との手紙の交換を論じることによって，旧植民地内に温存された権力関係と植民地主義言説への対抗手段との関係を明らかにする。

2.

No Telephone to Heaven は，女性主人公 Clare Savage が母国ジャマイカ離れ，アメリカ，イギリス，そして再びジャマイカに戻るという地理的移動と共に展開する。クレアの家族は 1960 年にそろってアメリカに移住するが，間もなく離散する。父 Boy が白人アメリカ社会への同化を熱望する一方で，母 Kitty は，白人至上主義のアメリカに適応出来ないばかりか，アフロ・アメリカン共同体にも馴染めず，次女 Jennie を連れてジャマイカへと帰国したからだ。父と共にアメリカに残ったクレアは，父の願い通りに高校に進学しながら，父と母の離別の理由，そして，母の帰国の際，妹のみが選ばれた理由を探るべくジャマイカにいる母と手紙の交換を開始する。

本小説では，二種類の手紙のやり取りが行なわれる。一つは父ボーイと母キティの間で，もう一つはクレアとキティの間で交わされる。キティは，母国ジャマイカ以外では家族は団結出来ないと考え，クレアとボーイにジャマイカに戻るよう繰り返し手紙で説得する。

> Boy suggests that he and his elder daughter may pay a visit. Yes, Kitty writes, that would be a nice thing. Let me know when and I will arrange a place for you to stay. But, he responds, money is short. They will visit as soon as he can make the fare and buy presents for everyone. (100)

キティが母国での永住を希望するのに対して，ボーイはアメリカでの経済的，社会的向上の達成を信じ目指していた。手紙の交換によってボーイとキティの間の “grace connection” は維持されるも，二人の関係に変容は期待出来ぬままだった（100）。

ボーイとキティの関係が平行線をたどる一方，クレアとキティとの結びつきは時空間を越えて強化されていく。クレアとキティの関係は特に，キティからの最後の手紙を介して深まることになる。ボーイは，キティの死を彼女の兄弟からの電話で知り，キティの最期を次のようにクレアに伝える。“He [Kitty’s brother] said she had been suffering from headaches. [...] They asked her to see a doctor [...] begged, he said [...] to go to Miami if necessary [...] but she wouldn’t leave. [...] Your mother was the soul of stubbornness” (103)。たとえ命を失ったとしても，母国ジャマイカから離れようとしなかった母の強固な意志と苦しみを伝え聞いたクレアは，母から宛てられた最後の手紙を読み直す。

> “I am glad you are studying,” she [Kitty] wrote a P.S. to her elder daughter. “I hope someday you make something of yourself, and someday help your people.” A remainder, daughter —— never forget who your people are. Your responsibilities lie beyond me, beyond yourself. There is a space between who you are and who you will become. Fill it. (103)

しかし，今は亡き母からの手紙にクレアはいかに応答することが出来るのだろうか。もはや母には返信する，書き返すこと（write back）は出来ないクレアは，母への思いを，父に口答えする，言い返すこと（talk back）によって成し遂げる。つまり，母からの最後の手紙は，クレアが父に対抗する重要な機会を与えたのだった。ボーイは，クレアもまた白人アメリカ社会に同化してほしいと願っているので，彼女がアメリカの人種差

別問題に批判的になるのを好まなかった。とりわけボーイがクレアに怒りを覚えたのは，彼女が母の死に際しては目に見えるかたちで悲しみをあらわさなかったのに対して，1964 年アラバマ州バーミンハム教会爆破事件で犠牲になった黒人少女たちには強い共感を抱いたときのことだった。

> “You callous little bitch. I suppose you have more feeling for niggers than for your own mother.” [...] Clare breathed deep, looked full into his furious face. “My mother was a nigger”—— speaking the word at him. His five long fingers came at her, as she had expected, marking her cheekbone, making her weep in shock. “And so am I,” she added, softly. (104)

ボーイは，初めてアメリカの地を踏んだとき，自分には白人植民者の血が混じっていると主張し，アフロ・アメリカンとの差異を強調した[2]。事実ボーイは，白人として通用するくらい肌の色が薄い一方，キティは黒い肌をしていたのだ。そして，父の外見的白さはクレアに受け継がれ，母の黒さは妹ジェニーに受け継がれた。しかしいくら白人植民者との混血を主張しても，アメリカでは結局，アフロ・カリビアンはアフロ・アメリカンと同様「ニガー」と見なされる。にもかかわらず，その肌の白さを頼りにアメリカ白人社会との同化を夢見るボーイは，政治的独立後も植民地時代を通じて内面化された自己蔑視の残滓を体現する。クレアとボーイの関係において強調すべき点は，クレアによるアメリカでのアフロ・カリビアンのポスト・コロニアル的状況の理解は，父を介して実現されたということにある。つまりそれは，ポスト・コロニアル的主体と総称されるもの内部での差異に対する批判を通じて，植民地主義言説への抵抗がなされることを示しているのである。

クレアは，父が使う言葉もまた転覆の手段として援用する。父がクレアに，母の死後，妹ジェニーがアメリカに訪れる旨を伝えるとき，ジャマイ

カで母と共に育ったジェニーとアメリカで父と共に育ったクレアの違いが述べられる。“ ‘Your sister will come here.’ And so she did. Speaking her mother’s language, while Clare spoke her father’s adopted tongue”（104）。ここで注目に値するのは，クレアが，「父の借用の言葉」を話すという点である。Paul Gilroy は *Black Atlantic*（1993）において，アメリカ，イギリス，そしてカリブ海地域のディアスポラ文化が互いに影響を与えながら形成される様子のみならず，植民地との相互交渉の結果，宗主国文化が事後的に生み出されたことを論じている。ギルロイは，motherlands と mother countries の間の知的, 政治的交雑を考察する意図を,「借用」と「養子縁組」という言葉を用いて次のように説明する。

> My concern here is less with explaining their longevity and enduring appeal than with exploring some of the special political problems that arise from the fatal junction of the concept of nationality with the concept of culture and *the affinities and affiliations* which link the black of the West to one of their adoptive, parental cultures: the intellectual heritage of the West since the Enlightenment. (emphasis mine; 2)

クレアは，父が「借用の言葉」として使う言語，すなわち英語を，植民地主義的規範の内面化の道具として受け取るよりむしろ，規範転覆の手段として援用する可能性を見出しているのである [3]。

3.

19 歳で単身アメリカに移住した Lucy は，裕福な白人家庭に住みこみながら夜学に通っている。主婦 Maria は，彼女なりの優しさでルーシーに接し，ルーシーはマリアの素直さを受け入れる。しかしルーシーは，マリアと自分の間に主人と奴隷の権力関係が働くのを鋭く批判しながら，自分と母，母国アンティグア，そしてアメリカとの関係を，相反する感情を抱き

つつ見つめ直していく。*Lucy* における母娘の手紙のやり取りは，ルーシーが母との連絡を拒むという点において，*No Telephone to Heaven* のクレアとキティの場合と異なる。ルーシーは彼女自身の意志でアメリカに移住したのだが，それは，母が看護婦として自立したルーシーを誇らしく思いながらも，伝統的な女性の領域にルーシーを閉じ込めようとしたからだった。特に母がルーシーと彼女の弟に対して異なる態度を示したとき，具体的に言えば，弟だけに高等教育を受けさせようとしたとき，ルーシーは，「刀が心をつきさすような」感じを覚え，母を「ミセス・ユダ」と呼び，母国アンティグアを去ったのだった（130–31）。はたして，ルーシーと母との間で交わされる手紙は一体どのようなものなのか。ルーシーは母にむかって何を書き返したのだろうか。

No Telephone to Heaven において，クレアが母から受け取った手紙が二人の親密な関係を築く役割を果たしたのに対し，ルーシーに送られてくる母からの手紙はルーシーの母に対する怒りを増加させる。母からの手紙は，母がアンティグアで耳にする，アメリカで起きた「恐怖と悪意のある事件」の羅列と，性生活を含む生活上の諸注意と警告で満たされていた（20）。ルーシーはどこへ行くにしてもブラジャーの中に母からの手紙を潜ませていたのだが，それは「愛情」のためではなく「憎しみ」のためだった（20）。母と手紙を頻繁にやり取りするクレアとは対照的に，ルーシーは母に返信することも，ましてや封を切ることさえしなかった。

> I had [...] a collection of letters from her in my room, nineteen in all, one for every year of my life, unopened. I thought of opening the letters, not to read them but to burn them at the four corners and send them back to her unread. [...] but I could not trust myself to go too near them. I knew that if I read only one, I would die from longing for her. (91)

しかし，ルーシーは母を憎むと同時に母を求めていることを告白し，最終的に彼女は，母からのある手紙に返信する。その手紙とは，父の死とそれによって引き起こされた経済的苦境を綴ったものだった。ルーシーが返信した手紙は冷淡で，母の教育方法を批判する。“I reminded her that my whole upbringing had been devoted to preventing me from becoming a slut; I then gave a brief description of my personal life, offering each detail as evidence that my upbringing had been a failure [...] ”（127–28）。さらにその手紙は，ルーシーの固い意志，つまり自分は決して母国には帰らないという宣言で結ばれていた。しかし，ルーシーがどんなに冷淡な手紙を書いて母親の期待を裏切ったとしても，懲りずに手紙を書いてよこす母についてルーシーは次のように語る。“[S]he would always love me, she would always be my mother, my home would never be anywhere but with her”（128）。その後，ルーシーはたまりかねてもう一度だけ母に手紙を書き返す。そこでルーシーは故郷に帰ると初めて記すのものの，それは真っ赤な嘘であった。このように，ルーシーと母の間で分断されながらもぎこちなく交わされる手紙は，母国からの母の呼びかけを完全には無視できず，応答せずにはいられない母娘の緊張関係を示している。「故郷は二つの可能性に限定されるべきではない（“In this great big world, why should my life be reduced to these two possibilities?”）」というルーシーの言葉は，まさにルーシーのディアスポラ的状況を語っているのである（21）。

4.

No Telephone to Heaven と *Lucy* では，アメリカとカリブ海諸島の間で母娘の手紙がやり取りされるのに対し，*The God of Small Things* ではイギリスとインドの間で手紙が行き交う。本作品は，共産党政権下の 1969 年，インド南西部の町ケララを舞台としたある旧家の没落の物語である。主人公の男女の双子 Estha と Rahel は，離婚した母 Ammu と共にケララでピ

クルス工場を営む母の実家で暮らすが，アムーは出戻りゆえに一族の恥と見なされる。ある日，双子はイギリス人女性の血を引く従姉の不慮の事故に遭遇する。またアムーは，その不慮の事故の罪を着せられることになる不可蝕民 Velutha と転覆的，境界侵犯的な恋愛関係を結ぶ。物語は，アングロフィリアである双子の祖父と伯父 Chacko を頂点とする家父長主義的体質と，それを内面化する女性たち，さらには，階級闘争を通じて社会改革を目指す共産党の自己矛盾を描き出す。

双子の伯父チャコと彼の母親 Mammachi との手紙は，チャコの留学先であるイギリスと母国インドを往復する。オックスフォードで勉強するチャコは母からの手紙に返信しないどころか，ルーシーと同様に封を切ろうともしない。それにもかかわらず，ママチは家庭での出来事を詳細に手紙に記してよこす。イギリス人女性 Margaret と結婚したチャコは，しかしながら，その生活が経済的に苦しくなるとママチに金の工面を頼む手紙を書く。ママチは，唯一の息子がイギリスで成功しなかったことを嘆きつつも寛容な態度をとる。結局チャコはマーガレットと離婚し，ママチが待つインドに帰国する。

チャコとママチの関係は，ポスト・コロニアル的主体が共有する問題を示しながらも，ジェンダーの差異が生み出す，母そして母国 に対する応答の違いを示している。*The God of Small Things* と，これまで考察した二作品との明らかな違いは，チャコが，ママチ自身が従属している家父長主義的存在であるがゆえに，ママチが彼に何の助言も与えない，与えられないという点である。インドよりもイギリスに魅了され，母国をそして母を拒むチャコの姿はルーシーとだぶる。チャコは，彼のインド帰国を心待ちにしている母を次のように批判する。“Chacko needed his mother’s adoration. Indeed, he *demanded* it, yet he despised her for it and punished her in secret ways” (236)。ここにはルーシーと同様に，チャコのママチに対する愛憎という相反する感情が見て取れる。チャコは母の愛情に甘んじながらも，家父長としてのチャコに依存し多大な期待を寄せる母を疎ましく

思っているのだ。

このような母息子の関係を考慮すると，チャコがイギリス人女性マーガレットとなぜ恋に落ちたのかがうなずける。“What Chacko loved most about her was her self–sufficiency. Perhaps it wasn’t remarkable in the average English woman, but it was remarkable to Chacko”（233）。マーガレットは「彼女自身の自己充実」を持っていて，それがチャコにとっては「驚くべきこと」であった。しかしチャコは, 母がインドにおいてなぜマーガレットと同様の「自己充実」を得られないのかを理解出来ずにいる。ルーシーも母に対して矛盾した感情を抱いていたものの，独立後のジャマイカ女性に課された家父長主義的ジェンダー規範を理解していた。一方チャコは，ジェンダーの差異に由来する特権的立場をインド国内そして家庭内で掌握しているがために，母国にいる母に課された制約に無批判である。しかしそれは同時に，伝統性的役割の罠に陥っているチャコの姿をも示しているのであった。

5.

No Telephone to Heaven では，クレアは母からの手紙に書き返すことによって，母とそして母国との絆を強めた。またさらに，母からの手紙に返信することは，アメリカに同化しようとする父，ひいては，アメリカに住むアフロ・カリビアンのディアスポラ的状況への応答ともなった。クレアとは異なり，ルーシーは母からの手紙に返答することを，そして母国へ帰還することを拒んだ。しかしながら，母親への批判に満ちた手紙は，逆説的に，母国に住む母，女性たち，さらにはルーシー自身にとりついた植民地言説の残像への抵抗でもあった。チャコにとっては，母との手紙のやり取りは，ポスト・コロニアルのインド社会における母の立場への理解をもたらさなかったものの，家父長主義を内面化する彼自身の閉塞状況を示すことによって，回復されるべき「サバルタン」とは一体誰なのか，という問題を改めて提示したとも言える。Salman Rushdie は，“The Empire

Writes Back with a Vengeance”（1982）と題された論考で，もはや大文字で始まる “English” はないことを高らかに宣言している。この題名を踏まえるならば，以上考察した三人のポスト・コロニアル女性作家の意図は以下のようにまとめることが出来るだろう。それは一つには，宗主国に対抗して書くということ（write against their mother countries）。そしていま一つは，母国のために書くということ（write for their motherlands）である。母へ向かって書かれた手紙は，植民地主義批判と対抗は，必ずしも抑圧的植民者のみに向かうのではないことを示す。植民地主義言説の残像は被植民者に投影され，旧植民地および被植民者内部での別形式の権力関係と交錯するゆえに，植民地主義批判はむしろ，ポスト・コロニアル的主体である娘，息子から，同じくして異なるポスト・コロニアル的主体である母への応答，ときにその失敗を通じて繰り広げられるのであった。

注

1．“othermother” のより詳しい説明については，Collins を参照。
2．本小説および *Abeng*（1984）の自伝的要素については，Birkle と Smith に詳しい。
3．本小説における Cliff の，英語とジャマイカ・クレオールを用いた言語的実践については，Elia を参照。

参考文献

Alexander, Simone A. James. *Mother Imagery in the Novels of Afro-Caribbean Women*. Columbia: U of Missouri P, 2001.

Ashcroft, Bill, Gareth Griffiths, and Helen Tiffin. *The Empire Writes Back: Theory and Practice in Post-Colonial Literatures*. New York: Routledge, 1989.

Birkle, Carmen. “Colonial Mother and Postcolonial Daughter: Pocahontas

and Clare Savage in Michelle Cliff's *No Telephone to Heaven*." Hornung and Ruhe 61–76.

Cliff, Michelle. *No Telephone to Heaven*. 1987. New York: Plume, 1996.

Collins, Patricia Hill. "The Meaning of Motherhood in Black Culture and Black Mother-Daughter Relationships." *Sage* 4.2 (1987): 3–10.

de Abruna, Laura Niesen. "Family Connections: Mother and Mother Country in the Fiction of Jean Rhys and Jamaica Kincaid." Nasta 257–89.

Elia, Nada. *Trances, Dances, and Vociferations: Agency and Resistance in Africana Women's Narratives*. New York: Garland P, 2001.

Gilroy, Paul. *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness*. Cambridge: Harvard UP, 1993.

Hornung, Alfred, and Ernstpeter Ruhe, eds. *Postcolonialism and Autobiography*. Atlanta: Rodopi, 1998.

James, Louis. *Caribbean Literature in English*. London: Longman, 1999.

Kincaid, Jamaica. *Lucy*. New York: Plume, 1991.

Loomba, Ania. *Colonialism / Postcolonialism*. New York: Routledge, 2001.

MacDonald-Smythe, Antonia. *Making Homes in the West/Indies: Constructions of Subjectivity in the Writings of Michelle Cliff and Jamaica Kincaid*. New York: Garland P, 2001.

Morris, Ann R., and Margaret M. Dunn. "The Bloodstream of Our Inheritance: Female Identity and the Caribbean Mothers'-Land." Nasta 219–37.

Nasta, Susheila, ed. *Motherlands: Black Women's Writing from Africa, the Caribbean, and South Asia*. New Brunswick: Rutgers UP, 1992.

Roy, Arundhati. *The God of Small Things*. New York: Harper, 1997.

Rushdie, Salman. "The Empire Writes Back with a Vengeance." *Times* 3 July. 1982, natl. ed.: 8 +

Simmons, Diane. *Jamaica Kincaid*. New York: Twayne, 1994.

Smith, Sidonie. "Memory, Narrative, and the Discourses of Identity in *Abeng* and *No Telephone to Heaven*." Hornung and Ruhe 37–60.

Spivak, Gayatri Chakravorty. "Can the Subaltern Speak?" *Marxism and the Interpretation of Culture*. Eds. Cary Nelson and Lawrence Grossberg. Urbana: U of Illinois P, 1988. 271–311.

Synopsis

Writing Back to the Letter:
Dis/connections with the Motherlands in *No Telephone to Heaven, Lucy,* and *The God of Small Things*

Yukiko Fukase

For the post-colonial writers who explore the life of people in diaspora, the concept of "the mother" is significant because, as Simone A. James Alexander argues, it "is the cord that (dis) unites the motherland and the mother country." While "mother countries" signify Western colonial rulers such as England, France, and the United States, "motherlands" include the colonized countries such as India, the Caribbean, and Africa. In addition to the geographical and political senses, "the mother" also means a biological or surrogate figure in the homeland. Alexander further claims that the nurturing figure can be "other," in other words, "an enemy to her daughter, particularly when she appears to advocate colonial habits and mannerisms." Actually, while the post-colonial writers expose mother-daughter relationships which are negatively affected by the colonial rule, they also create subversive figures who challenge the legacy of colonialism. Examinations of how the female protagonist Clare in Michelle Cliff's *No Telephone to Heaven* (1987) and Lucy in Jamaica Kincaid's *Lucy* (1990) receive and respond to the letters from their mothers will show psychological dis/connections with their mothers and motherlands. Moreover, by comparing the descriptions of the letters exchanged between a male character Chacko and his mother in Arundhati Roy's *The God of Small Things* (1997) with those appeared

in the other two novels, it will be clear that the gender difference plays a significant role in the construction of the characters' relationship with their mothers and motherlands.